

七尾市名誉市民に仲代達矢氏

～去る1月25日、能登演劇堂において新市誕生後初めて名誉市民の称号が贈られました～



氏は、昭和60年から毎年中山町(当時)で「無名塾」の合宿を行い、多くの町民との交流の中で、夫人とともに「第2のふるさと」と語るような絆が生まれました。

平成7年には、氏の監修の基に、全国でも珍しい演劇専用ホール「能登演劇堂」が完成し、氏には同時に名誉館長に就任いたしました。

これ以後、「無名塾」は、三度のロングラン公演を含めて毎年「能登演劇堂」を初日として全国公演を続けられ、全国から多くの観劇客を迎えて交流人口の拡大と町の活性化におおいに寄与し、各方面から大きな注目と称賛が寄せられました。

また、氏と「無名塾」の力強い支援により、平成6年から劇場の音響、照明などの技術者養成講座「舞台芸術アカデミー」の開催や高校生を対象とした

「高校生の書いた戯曲」募集を行っております。これら氏の支援を背景として、平成9年から中部地区の高校生を対象にした「ワークシヨップ」を開催した他、10年からは演劇同好会「中島町民劇団」が生まれるなど、演劇によるまちづくりが大きく進展してきました。

平成16年10月の合併後も、氏の新七尾市における活動は変わることなく、「いのちぼうにふろう物語」「ドライブング・ミス・デイズ」そして、「ドン・キホーテ」など、引き続き「能登演劇堂」から全国公演をスタートされると共に、県



無名塾「ドン・キホーテ」舞台より

立中島高等学校演劇コースの生徒への指導・助言もいたしております。

町民劇団もあらたに劇団「N」として定期公演を行っており、

「能登演劇堂」を核とした演劇によるまちづくりは七尾市の大きな特徴となっております。これら氏の演劇文化の振興と地域の活性化に果されたご功績は誠に顕著であり、七尾市民の誇りであります。

仲代氏からのメッセージ

栄えある七尾市名誉市民の称号をいただき大変光栄です。25年前初めて能登に来て、当時の中島町で無名塾の合宿を行ってきました。七尾市は、無名塾にとって「第2のふるさと」です。来年秋の能登限定公演「マクベス」では、自然を借景としたこのホールの特徴を活かした能登でしかできない素敵な芝居をつくり、これからの能登のため頑張っていきたいと思っております。

仲代 達矢氏 略歴

- 昭和7年 東京生まれ
- 30年 俳優座養成所卒業。"新劇"新人賞「幽霊」
- 36年 毎日映画コンクール男優主演賞「人間の条件」
- 37年 キネマ旬報主演男優賞「切腹」
ブルーリボン賞主演男優賞「切腹」
- 49年 紀伊國屋演劇賞個人賞「リチャード三世」
- 50年 無名塾発足
芸術選奨文部大臣賞・毎日芸術賞「令嬢ジュリー」 「どん底」
- 55年 毎日映画コンクール男優主演賞「影武者」
ゴールデナロー賞(映画賞及び大賞)
「影武者」 「二百三高地」
ブルーリボン賞主演男優賞「影武者」
芸術祭賞優秀賞「ソルネス」
- 平成4年 シュバリエ芸術文化勲章
- 6年 紀伊國屋演劇賞個人賞「リチャード三世」
- 7年 中島町名誉市民、能登演劇堂名誉館長就任
- 8年 紫綬褒章
- 11年 モンブラン・デ・ラ・キュルチュール賞
- 12年 坪内逍遙大賞
- 15年 勲四等旭日小綬章
- 16年 松尾芸能大賞
- 17年 読売演劇大賞・選考委員特別賞、石川県観光大使就任
- 19年 文化功労者
第52回「映画の日」特別功労大賞

2009年秋 待望の能登演劇堂限定公演決定

マクベス

能登演劇堂
ロングラン公演

シェイクスピア四大悲劇の一つマクベスが能登演劇堂に。
演劇の常識を超えた壮大なストーリーがここに！

作 W・シェイクスピア
出演 仲代達矢 若村麻由美 無名塾

この春、七尾は桜満開

国宝「桜図」特別公開を

満喫するための等伯・久蔵マメ知識を紹介

会期 4月5日(土)～5月6日(火・休) 石川県七尾美術館

新春1月号で、この春に長谷川等伯の長男・久蔵の国宝「桜図」が特別公開されることをお知らせしました。久蔵についてはまだよくご存じない方も多いと思います。また、等伯についても、今や「世界の等伯」であることを改めて紹介します。

長谷川等伯(一五三九～一六一〇)

室町時代末に能登国七尾の畠山氏の家臣・奥村家に生まれ、幼少の頃に長谷川家へ養子に迎えられたと言われます。20歳代から信春の名で活躍、この頃に妻子を連れて上洛したと考えられます。40歳代は、親交のあった日通上人や千利休が大坂堺の出身である事、当時の堺は茶の湯も盛んで、中国の画面などが床の間を飾っており、堺の文化人たちと親交を結び、長谷川派の基礎を築いたと見られます。50歳代には名を等伯と改め、長谷川一派を率いて狩野派に対抗します。しかし、一派で制作に当たった祥雲寺障壁画群(現智積院蔵)完成間近、長男・久蔵の死に直面します。その悲しみの中で描いた

のが、国宝「松林図屏風」(東京国立博物館蔵)で、この作品は等伯の心象風景とも、能登の原風景とも言われているのです。その後も、等伯は悲しみを乗り越えて水墨画の名作を次々と生み出していきます。60歳以降の「法眼」と記された作品については、弟子の作とする研究者もいますが、狩野派のように弟子との合作、工房制作があつて当然とも言えます。最後は、72歳の時に仕事で江戸に向かい、到着2日後に逝去したとあります。

国宝「松林図屏風」は、

国宝アンケートで人気No.1

「松林図屏風」は、数年前の国宝アンケートで人気No.1でした。それを裏付けるように、平成17年の七尾での特別公開には、14日間で全国から5万7千人以上の方が来館し、その名画に見入りました。没後400年となる平成22年2月には、東京国立博物館と京都国立博物館で大々的な「長谷川等伯展」が開催されます。

平成13年には、スイスの美術館でも「長谷川等伯展」が開催されており、「七尾の等伯」から「日本の等伯」、今や「世界の等伯」へと、その人気と評価はますます高くなっているのです。



等伯の長男

長谷川久蔵(一五六八～一五九三)

久蔵は能登国七尾に生まれ、幼少の時に父・等伯と共に上洛、等伯の後継者として将来を嘱望されながらも、若くして亡くなりました。それゆえ、現在のところ確実とされる作品は3点のみです。

その中で代表中の代表とされ、江戸時代には同じ祥雲寺障壁画群(現智積院蔵)の中にあつて、等伯の「楓図」よりも人気が高かったとされるのが、国宝「桜図」です。これは、僅か3歳で

亡くなった豊臣秀吉の長男・鶴松の菩提を弔うために建てられたお寺の室内を飾るもので、久蔵は等伯の右腕となつて制作にあたつたと伝えられます。しかし、その完成間近、その久蔵が26歳で逝去するのです。

江戸時代に書かれた『本朝画史』には、「画の清雅さは父(等伯)にまさるほどであり、長谷川家のなかで彼に及ぶものはない」とあり、京都の清水寺にある国指定重要文化財の「朝比奈草摺曳図絵馬」も、見物の行列ができた記録されていますから、その死はあまりにも無念であつたと言えるでしょう。

この春は、

七尾の桜を満喫しませんか

「清雅」と言う言葉がぴったりなのが、他でもない「桜図」です。会期はあえて桜の時期に合わせました。七尾や能登には、沢山の「桜の名所」があります。今年は地震の風評を吹き飛ばして華やかに、室内外の「桜」を満喫しましょう。

3月号では、「桜図」の魅力についてさらに詳しくご紹介するほか、七尾初公開となる等伯や長谷川派作品も紹介しますのでお楽しみに。

※お問い合わせは

石川県七尾美術館

☎53-1500